長編記録映画『琵琶法師 山鹿良之』

監督：青池憲司　製作主任：長島健二
あおいけ・けんじ、ながしま・けんじ

この映画をフィルムで撮ってよかった

監督：青池憲司

映画『琵琶法師 山鹿良之』は1992年の作品で、16ミリフィルムで撮影し、16ミリプリントで上映した。当時のドキュメンタリー映画としてはあたりまえのことだが、振り返れば、そのころがフィルムからビデオ撮影に移行する端境期であったように思う。

研究者の兵藤裕巳さん（現・学習院大学名誉教授）、田代啓史キャメラマンと3人で、熊本・南関町の山鹿良之さんを、挨拶とロケハンをかねて訪ねたときは、この人をフィルムで撮ることになんの迷いもなかった。

1991年12月柳川市「若宮神社」での「夜籠り」
山鹿師『小栗判官』を演唱

説教節「小栗判官」全七段（六段とも）の琵琶語りと、「小栗判官絵巻」（岩佐又兵衛　画）を縦糸に、じっちゃんと呼ばれ親しまれている山鹿さんの日常（91歳、ほぼ失明状態、ひとり暮し）を横糸に織りなした映画にしよう、と考えていた。問題が一つあった。

「小栗判官」は弾き語り6時間半を越える大作である。フィルム使用量には当然制約があり、仕上り呎（完成時間）を想定して、その何倍かが許容量になる。作品の内容によるが、一般的には3倍から5倍だった。この映画の場合は製作者（石垣誠一さん、長島健二さん）の度量でかなり自由につかえた。だからといって、語り全段をフィルムで撮影する条件が整ったわけではもちろんない。

準備期間中に、全段のテキストを読み込み、どの段のどの場面をつかうかを決めて撮影に臨んだ。語る場所は、由緒ある芝居小屋、村のお宮さん、旧家の座敷、そして浅草の演芸場などで、山鹿さんにはそれぞれの段を通しで語ってもらった。つかいたい場面のちかくになるとキャメラのスイッチを入れた。演者も撮影スタッフも本番一本勝負だから、わたしのミスでのリテークは許されない。どの場所でのどの段も乾坤一擲、集中とその持続、緊張感みなぎる現場となった。

弾き語り撮影のラストは浅草の木馬亭である。ここで、小栗と照手の最終段を語る山鹿さんはじつに色気があった。肌の艶、声の張りに、男でも女でもなく、生きものの精気とでもいおうか、それを、91歳の琵琶法師はもっていた。芸の力が生みだす摩訶不思議な魅力であった。ラッシュを見たとき、あらためて、フィルムで撮ってよかったと実感した。

完成した映画の上映は浅草木馬亭を封切に、山鹿さんの地元南関町でも行なった。ご本人もいちばん前の席に陣取って見てくれた。ただ、目が不自由な状態だから、じっさいにはほとんど見えていなかったと思う。終ってから感想を尋ねると、「下手な琵琶弾きだなあ、あれは」と愉快そうに笑っていた。その笑顔と声がいまも記憶の底からよみがえってくる。

南関町での試写会。山鹿良之師と故木村義夫さん
（1992年11月24日熊本日日新聞より）

山鹿さんは、映画撮影を終えた1992年以降も地元での芸能活動をつづけていたが、1996年に95歳で亡くなった。大往生といってよいだろう。ドキュメンタリー映画をつくるなかで、どの作品でも印象深い人にたくさん出会ってきたが、山鹿さんの存在は際立っていた。芸はもちろん、生活も自分の規矩をもって生きた。その人をフィルムで撮る日々（撮影期間10か月、撮影実数30日）はゆたかな時間であった。

「じっちゃんの聲が聴こえる」弾き語りの聲が……

製作主任：長島健二

時代が平成に入った頃、私長島健二は、プロデューサーの石垣誠一氏と［株式会社オフィスケイエス］を立ちあげ、これまでに「愛知学院大学」のプロモーションビデオをはじめとして、企業PR他、数々のビデオ映像を製作していました。

そこに長編記録映画『琵琶法師 山鹿良之』の企画が持ち上がりました。それまでビデオ映像では製作主任を経験したものの、16 mmフィルムでの製作主任を経験したことはなく、是が非でも照明技師との二役を完璧にやり遂げたいとの一心で、この企画に参画しました。照明としては長嶋建人というこれまでに使っていたネーミングを技師として使用しています。

『琵琶法師 山鹿良之』の企画意図としては、著名な映画監督マーティン・スコセッシ氏が語る「最も個人的なことは、最もクリエイティブなことだ」という指針をもとに、私なりに製作主任として携わりました。

芸術史の専門家で学習院大学名誉教授　兵藤裕己先生や、邦楽研究家ヒュー　デ・フェランティ氏の協力のもと、企画原案、構成を何度も検討しました。

撮影では［山鹿師］の日常生活で公私を含めて献身的に支えて下さった地元の、故宮川光義氏や写真家の故木村義夫氏ほか、さまざまな方のお力添えで、この映画は出来上がりました。

南関町の自宅で演奏する［山鹿師］

飾り気のないお茶目な「じっちゃん」の実像を少しでも自然なままにお伝え出来るよう、撮影方法や時間配分にも細心の注意を注ぎながら、当時90歳を超える［山鹿師］の人となりや生き方、またどのような辻説法をしながら、どんな語りをしていたのか、より多くの方に伝えるにはどう撮れば良いのか、何度も何度も議論を重ねながら、撮影を迎えることになりました。

私は製作主任として全体のスケジュール調整と予算管理兼ドライバー、また徹底したナチュラルライティングの照明技師として八面六臂の働きをせざるを得ない立場で撮影現場に携わっていました。

この作品では、いかに効率的に、いかに短時間で内容のある画面を取り込むかが最大のテーマであり、課題でもありました。

幸いにも宮内庁から貴重な『小栗判官』絵巻をお借りすることができ、ドキュメンタリーの骨格に奇想天外な物語絵巻の語り物を縦軸にもってきたことが、この映画の見所になりました。

『小栗判官』絵巻（宮内庁提供）

この撮影では、照明設計的にも、いつどんな時間帯でもすぐにシュート出来るように、メインの［山鹿師］宅居間の天井部分にポールキャットでアイランプの300 wスポット6台、150 wスポット8台を四方八方に配置し、少しでもアングル的にワイドになるよう、すべてのアイランプをアミではなく、シェードを使用することにし、スイッチ盤で切り換えが短時間にできるようセッティング。メインライトは、LOWEL 1 KQ 3台、Dayシーンは、レフにしてもミラーにしても、すぐに使用できるようにあらかじめ配置しておきました。

「じっちゃん」の予想もしない動きに四苦八苦しながら、よりナチュラルなライティングに仕上げられたのは、慌てず、騒がず、時の流れにまかせたのが救い

地元公民館で演奏する［山鹿師］

になったようです。

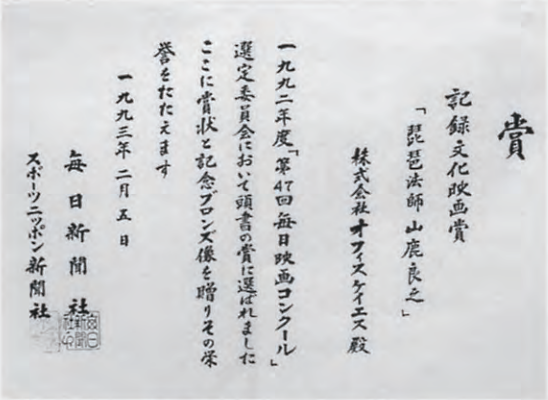
16 mm スタンダードサイズの画角との闘いは、狭い室内での工夫の数々。まさにライティング冥利につきました。

いよいよ仕上げです。この撮影は 16 mm スタンダードサイズのため、録音作業は「シネテープ」を採用し、より豊かな音作りを目指しました。メインの「テーマ音楽」もオリジナルで織田英子さんに作曲してもらい、アバコスタジオで音源を収録、さまざまなバージョンを用意し仕上げ作業に入りました。

何度かのラッシュ試写を繰り返す中「じっちゃん」の話す言葉がわかりづらいので、字幕スーパーを入れたらどうかという問題が発生しましたが、日頃の生活での言葉もまるで弾き語りのように話す［山鹿師］のひと言ひと言には、スーパーなど必要無いと結論づけました。

「じっちゃんの聲が聴こえる」……弾き語りの聲がいまでも甦ってくるのです。

さまざまな問題をクリアしながら、いろいろな方々の協力のもと無事完成した『琵琶法師 山鹿良之』は、何と 1992 年度「第 47 回毎日映画コンクール　記録文化映画賞」、「キネマ旬報」1992 年度文化映画ベストテン第 4 位、また、1992 年「文化庁優秀映画作品賞」の栄冠に輝きました。



賞

記録文化映画賞

「琵琶法師 山鹿良之」

株式会社オフィスケイエス殿

一九九二年度「第47回毎日映画コンクール」
選定委員会において頭書の賞に選ばれました
ここに賞状と記念ブロンズ像を贈りその栄
誉をたたえます

一九九三年 二月 五 日

毎日新聞社

スポーツニッポン新聞社

毎日映画コンクール表彰状

浅草寺を参拝する［山鹿師］

満面の笑顔の「じっちゃん」

「遊行寺」小栗判官の墓前で読経する［山鹿師］

映画『琵琶法師山鹿良之』いざ本番

［琵琶法師山鹿良之生誕120年特別プロジェクト］の上映会と公演が、山鹿師縁りの浅草は「木馬亭」で始まった。コロナ禍の緊急事態宣言が続く中、50%の集客に対応せざるを得なくなりました。それでも暑いなか、お運びいただいたお客さまには、ただただ感謝するばかりです。

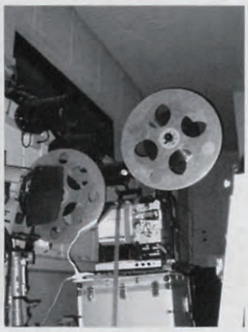
今回私たちは、16 mm映写機による臨場感溢れる上映会を企画しました。座席の後ろ側からかすかにカタカタと聴こえるフィルムの音は、なぜか懐かしさすら感じるのは何なんだろうか…。デジタルとは違う温もりのある温度差に誘われてる安心感なのかも知れない。あらためてアナログの良さを皆さんにご紹介できたことが、何よりも嬉しく思う。

壱の部では今注目の女性浪曲師「天中軒すみれ」が、曲師：沢村美舟とともに『関孫六伝／恒助丸の由来』を演じきり会場全体が盛り上がる。

また続いては、山鹿師最後の弟子と呼ばれる「玉川教海」が奏でる肥後琵琶語り『道成寺』を熱演…。山鹿師が天国から導き出しているような熱気を感じる素晴らしい琵琶語りであった。

二日間にわたる四公演イベントが終了し、いよいよ9月からはミニシアターによる全国一般公開が始まります。

公演ちらし



16 mm映写機

開場前の木馬亭入口

女流浪曲師：天中軒すみれ　曲師：沢村美舟

皮切りは、9月のシルバーウィークに新宿『K's cinema』からはじまり、10月には大阪『第七藝術劇場』また10月後半には、京都『京都シネマ』で公開します。

詳しくは、［https://biwahoushi120.work］まで。

ミニシアターちらし

山鹿師最後の弟子：玉川教海